

ヒトラーの指揮官ハインツ・グデーリアンと ドイツ装甲部隊の進化

マルクス・ペールマン

ドイツ装甲部隊の戦間期における進化は、一般的に 20 世紀の大きな軍事的成功体験の一つとみなされている。1939 年のポーランド侵攻及び 1940 年のフランス侵攻では、戦車が決定的な役割を果たした。1941 年のソビエト侵攻では、ドイツ国防軍 (*Wehrmacht*) は、戦車と機械化狙撃師団なしにモスクワの入口にたどり着けなかっただろう。1942 ~ 1945 年の大戦後半でさえ、装甲部隊はドイツの防衛の柱であり続けた。

大戦初期となる 1939 ~ 1940 年の作戦中、ドイツ陸軍が有する戦車の数は敵国よりも少なく、敵国より高性能な戦車も保有していなかった。しかしながら、ドイツ陸軍はこの兵器システムを、それまで誰も試したことがない作戦上の役割に運用した¹。加えて、ドイツ陸軍は、戦車の技術力を従来の指揮統制の文化と調和させることができた。したがって、ヒトラーが率いる軍において、戦車乗りが最も優秀な指揮官とみなされたのも意外なことではない。エルウィン・ロンメルがその一人である。また自身は戦車兵ではなかったが、機動作戦の名手として知られるエーリッヒ・フォン・マンシュタインも重要な人物であった。とはいえ、戦車部隊の指揮官として最も名高い人物は間違いなくハインツ・グデーリアンだった。彼の物語ほどしばしば語り継がれたものはない²。よく知られた彼の英雄譚は、次のようなものだ。1916 ~ 1918 年の西部戦線で、若き将校グデーリアンは新たな兵器である戦車の将来的な可能性に気付いた。戦間期には、自らの構

¹ フランス戦については、カール・ハインツ・フリーザー『電撃戦という幻 (上・下)』大木毅、安藤公一訳 (中央公論新社、2003 年) (Karl-Heinz Frieser, *Blitzkrieg-Legende. Der Westfeldzug 1940*, German edition 1995) を参照。日本語資料の調査に協力してくれたフランク・ケーザー氏に感謝する。

² 英語で書かれた最も優れた伝記は、Russell A. Hart, *Guderian. Panzer Pioneer or Myth Maker?* (Washington D.C. 2006) である。Kenneth Macksey, *Guderian. Creator of Blitzkrieg* (London 1975) は刊行時期が古いものの、自身も戦車指揮官である著者による独自の意見が盛り込まれている。ドイツ語によるグデーリアンの評伝が、今も待たれる。

想を訴えて保守的な軍部エリートと対立することも多かった。1935年、ついに彼の案が受け入れられて装甲（Panzer）師団が誕生した。グデーリアンは、ドイツの装甲部隊の「生みの親」³となった。この話は、更にこう続く。グデーリアンは大戦初期の作戦で、自身が勇敢でカリスマ性のある指揮官であることを証明した。独裁者アドルフ・ヒトラーを始めとする、上官や目上の人物にも率直に物を言い、参謀本部の事務方を見下していた。最後にはグデーリアンは、軍事的才能に欠けるヒトラーのせいで、勝利の手段である装甲部隊の壊滅を目にせねばならなかった。これは実際、よくできた物語に聞こえる。唯一の問題は、この話が専らグデーリアン自身の説明を基にしている点にある⁴。加えて、歴史研究者としては、研究対象とする人物本人が書いた自伝に頼りすぎることには疑念を持つべきである。

本稿は、1914～1945年のグデーリアンの軍人としてのキャリアを描くものである。彼の職業軍人としての業績と欠点を指摘し、1918年以降のドイツ軍装甲部隊の強化に果たした役割、及び第二次世界大戦における装甲部隊の指揮官としての役割を明らかにすることを試みている。

軍人教育と第一次世界大戦への従軍経験

この時代の軍人の経歴が皆そうであるように、グデーリアンの物語も1914～1918年の第一次世界大戦の経験に深く根ざしている。とはいえ、一歩下がって大局的な見地に立つ必要があるかもしれない。この時代のグデーリアンを理解しようとするならば、ドイツ帝国における職業軍人の世界を知る必要があるからだ。グデーリアンは1888年6月17日、農業が盛んなプロイセン東部の州にあるクルムで小地主の一族に生まれた。父親は軍人になることを選び、プロイセン陸軍の中将にまで昇進した。こうした家庭背景から、グデーリアンも士官学校に入り

³ 「生みの親」 [= 装甲兵器の発明者；Schöpfer] という言葉は、ドイツ語では宗教的な意味合いも持つ。

⁴ ハインツ・グデーリアン『電撃戦 ―グデーリアン回想記（上・下）』、本郷健訳（中央公論新社、1999年）（Heinz Guderian, *Erinnerungen eines Soldaten*, German edition 1952, English 1952）を参照。

軍人の道に進んだ。1908年に軽歩兵隊の将校に任官した。まだ若い下級将校であったため、1914年以前の大戦前の最後の平和な時期に君主制支持者から強い影響を受けることはなかった。プロイセン王国は彼の母国であったかもしれないが、プロイセンの君主制と貴族的な将校団が織りなす伝統的な価値観が、彼の精神面やイデオロギー面の指針になることはなかった。グデーリアンは、平民でありテクノクラートであった。陸軍大学で2年目を迎えた1914年に第一次世界大戦が勃発すると、参謀教育は中止された。最終的にグデーリアンは1918年、正式な試験の結果に基づいてではなく辞令によって参謀本部付となった。大戦中、当初は無線局長を務めたが、1915年以降は情報将校を任じられた。いずれの任務においても、グデーリアンは戦争の恐怖を一定の距離を置いて経験した。その意味では——自伝でのさりげない言及に反して——彼が第一次世界大戦中に実際には戦車戦を自ら体験していないのは興味深いことである。それどころか、1914～1918年の彼自身の体験は決して、後に装甲戦に関心を抱く上で不可欠な条件ではなかった⁵。グデーリアンはイタリアでの短期間の調整任務を除いて、西部戦線で4年を過ごした。1919年初めになってから東部戦区に配置され、数週間にわたり、バルト地域でボルシェビキと戦う義勇軍の参謀役を務めた⁶。

1918年11月にドイツが敗北し武装解除された後、グデーリアンは中隊長として、誕生間もない民主的なワイマール共和国が有する小規模な軍隊である *Reichswehr* (ワイマール共和国軍) に所属することになった。彼が軍に残れたのは、決して当然のことではなかった。ドイツ帝国が戦時中に保有した大規模な軍隊は解体させられ、ヴェルサイユ条約の規定に基づき(陸海軍合わせて)兵力115,000人への削減を求められたからである。空軍の保有は認められず、重火器、化学剤、戦艦、潜水艦、戦車を含む幅広い近代的な兵器システムについても同様に認められなかった。グデーリアンは軍人としてのキャリアを辛うじて維持できたが、この事実は彼の職業軍人としての能力を証明すると同時に、特に1919年初めにバルト地域で大戦中最後の任務に当たった頃の、彼の巧みな人脈術の

⁵ Markus Pöhlmann, *Der Panzer und die Mechanisierung des Krieges. Eine deutsche Geschichte 1890 bis 1945*, Paderborn 2016, pp. 187-188. を参照。

⁶ Macksey, *Guderian*, pp. 25-33.

証でもあった⁷。

戦間期

しかしながら、縮小されたドイツ軍で参謀将校の地位に就けるのは極めてまれであった。グデーリアンは、新設された自動車隊傘下の課への転任を1922年に打診され、これを承諾した。その後10年間、グデーリアンは部隊輸送の分野に携わることによって、自動車を装備した機動戦の可能性に対して十分な理解を育んだ。

ヴェルサイユ講和条約の規定(177条)により、ドイツは戦車及び装甲車両の生産、輸入、保守を禁じられていたことを忘れてはならない。この制限が、ワイマール共和国と近隣諸国の軍事装備に非対称性をもたらしただけでなく、大戦中はこの技術的革新に比較的消極的だったドイツ軍に、戦車という新たな兵器システムへの並々ならぬ関心を引き起こすことにもなった。その結果として1920年代半ば以降、軍の輸送部門ではこの「禁断の果実」が秘密裏に取り扱われた。制限には様々な抜け道があった。演習中はこの兵器システムの代わりにダミー戦車が使われた。ワイマール共和国軍は、ソ連と協力して試作品の戦車をテストできる秘密の訓練場を設置し、ドイツとソ連の兵員に対して訓練を実施した。とはいえ、最も重要な教訓は戦車に関する国際的な文献の研究を通して得られた。この分野では当初、J・F・C・フラーなどの英国の軍事学者が先駆者であったかもしれないが、早くも1928年にはドイツ人の専門家——グデーリアンもその一人であった——も十分な知識を身に付け、ドイツのドクトリンの伝統にこの新たな教訓を取り入れ始めた。

装甲戦に対するドイツ人の考え方の中核を担った組織は、装甲(*Panzer*)師団だった。それまで、ほとんどの近代軍が旅団構成を経験しており、師団構成は検討されたものの数多くの理由から却下されていた。ドイツの装甲師団は、1929

⁷ この時期の彼の後援者には、ハンス・フォン・ゼークト、ヴィルヘルム・ハイエ、ヴェルナー・フォン・フリッツェなどの将校がいた。いずれも、1918～1938年のワイマール共和国陸軍で目立った役割を果たすことになる。

～1934年の議論を経て誕生したものであり、したがってドイツの再軍備計画と時期が重なっていた。1934/35年の冬に試験的に1個師団が結成され、1935年8月に初となる演習が実施された。1935年10月15日に3個師団が正式に設置された。当初の編成では、装甲師団は1個戦車旅団、1個自動車化狙撃旅団、1個自動車化特科連隊、1個偵察大隊、1個戦車駆逐大隊、1個工兵大隊に加えて、複数の師団支援部隊から構成された。全体の兵力数は約12,000人だった⁸。

基本的なドクトリンは、1916～1918年に見られた塹壕戦シナリオで破城槌となり、歩兵隊を援護するという当初の役割から戦車を切り離すものだった。そのために、上述のような諸兵科協同編成に戦車が導入された。この新たな師団は、敵の前線を突破して指揮命令系統を寸断し、敵の後方を攻撃して、後に続く主力軍が突入するお膳立てをする先鋒部隊として計画された。これが成功するために欠かせない前提条件は、近接航空支援を行う能力と用意がある空軍による支援だった。

初期の装甲部隊には数々の問題があった。1934年春に大量生産が開始されたばかりであった。当時は数の面で迅速な増強が優先されたため、初期の戦車のほとんどは火力や装甲などの質が疑わしいものだった。1936～1939年のスペイン内戦でドイツ製戦車が使用されたことよって、その弱点がすぐさま露呈することになる⁹。しかしながら、この戦闘は、1939年9月までに構想を再修正し部隊を立て直す最後の機会にもなった。最も切迫した問題は依然として、装甲部隊に要する膨大な費用にあった。その後何年も、装甲部隊を完備した編成はドイツの作戦立案者にとって夢にとどまった。

1931年から自動車化部隊監督局の幕僚長を務めたグデーリアンは、配下の将校団を未来の装甲部隊のアイデアの源泉にした。とはいえ、この重要な時期に彼が独りで「生みの親」を務めたわけではない。それどころか、グデーリアンは極めて優秀な部下の一団に頼ることができた。一般にはほとんど知られていないこうした部下の中には、後にドイツ国防軍 (*Wehrmacht*) の大将となるヨーゼフ・ハルペ、ウェルナー・ケンプフ、フリードリヒ・パウルスがいた。最後に、上官

⁸ 1939年までの装甲師団の発展、編成、ドクトリンについては、Pöhlmann, *Panzer*, pp. 131-181を参照。

⁹ Steven J. Zaloga, *Spanish Civil War Tanks. The Proving Ground for Blitzkrieg*, Botley 2010を参照。

だった自動車化部隊監督官のオスヴァルト・ルッツ大将なしには、グデーリアンは決してこれほどの業績を挙げられなかっただろう。

この頃のグデーリアン自身の最大の資産は、軍の出版物を通して自身の兵科の要求を広く宣伝する能力にあった。グデーリアンは1937年、初の著書となる『Achtung – Panzer! (戦車に注目せよ!)』を刊行した。歴史的な説明と戦車戦術の紹介に加えて、装甲部隊の宣伝出版物としての要素も併せ持つ異例の書籍だった¹⁰。この最後の宣伝という役割が極めて重要になった。1933年以降は、ヴェルサイユ講和条約による制限などもはや過去の遺物となり、軍は極めて活発な再軍備のプロセスのただなかにあったからだ。その過程でグデーリアンは初めて、自身が所属する兵科にとっての表立ったロビイストとしての能力を証明してみせた。

グデーリアン自身が触れ回った更に根強い伝説の一つは、先見の明ある彼のアイデアが、保守的な軍指導部の抵抗に遭ったという主張である。この筋書きにおいてグデーリアンが最大の敵とみなしたのは、陸軍参謀総長ルートヴィヒ・ベック大将だった。しかし参謀総長の任務は、陸軍全体の増強の取りまとめを行い、異なる兵科や組織の要求を調整することにある点を強調しておく必要がある。戦車だけを重視することはできなかった。そのためベックは、極めて直情的なグデーリアンの手綱を締めねばならなかった。1935年まで、軍事作戦としての装甲戦という概念にドイツ陸軍ほど合理的に取り組んだ軍は世界になかった。これはベックの後任となったフランツ・ハルダー大将と同様に、ベック自身の功績でもあり、独裁者ヒトラーその人の功績でもあった。アドルフ・ヒトラーは訓練を受けた軍人ではなかったが、自身のイデオロギー的及び軍事的な目的を遂げるために必要な軍事的手段を、極めて直感的だが正確に把握していた。したがって、ナチスによる欧州での征服戦争と殲滅戦争は、グデーリアンの戦車部隊なしには想像できない。

¹⁰ ハインツ・グデーリアン『戦車に注目せよ — グデーリアン著作集』大木毅編訳（作品社、2016年）(Heinz Guderian, *Achtung – Panzer!*, German edition 1937)を参照。

装甲集団司令官（1939～41年）

ヒトラーによる開戦の決定に、グデーリアンが何らかの疑念を抱いていた痕跡はない。1939年にグデーリアンはついにオフィスの机を離れ、戦地の司令官となった。来る電撃戦(*Blitzkrieg*)に向けて、彼には生来の才能があるように見えた。グデーリアンは主導権を握り、先頭に立って指揮し、彼の妨害をする同僚には厳しく当たった。

1939年9月から10月の対ポーランド戦で、グデーリアンは、北方軍による挟撃作戦に加わった第19自動車化軍団を指揮した。対フランス戦では、彼の軍団は1940年5月の開始初期にスダンで重要な突破口を開き、瞬く間に渡河に成功した。これによりフランス軍とイギリス軍を分断することができた。このとき初めて、上官に服従しないグデーリアンの気質が明らかになった。一時的に指揮権を奪われたものの、彼の作戦の戦術的な成功が評価されて処分は取り消された。対フランス戦末期には、装甲師団（後に装甲集団に統合され、強力な空軍部隊の援護を受けた）を先鋒部隊に使用するという発想が、ドイツの新たなドクトリンに欠かせない要素になっていた¹¹。ポーランドとフランスでの成功は、グデーリアンに、彼自身に関わるイメージを宣伝する機会も与えた。しかしながら、グデーリアンの意欲と戦術的な独自性には負の側面もあり、上官との意思疎通を余り重視しなかった。彼はチームプレイヤーではなく、命令に従わなかった。洗練されていないグデーリアンの戦略は、ドイツ国防軍が奇襲という要因を味方につけて、自軍に劣る敵と戦う限りにおいて効果を発揮した。しかし、それも全て1941年6月22日に終わりを迎えた。

ソ連侵攻は、ヒトラーの戦争計画に重大な危機をもたらした¹²。グデーリアンは、侵攻開始の時点から第2装甲集団 (*Panzergruppe 2*) を指揮した。この臨時

¹¹ 名目上、1942年夏まで装甲集団 (*Panzerkorps*) は設置されていなかった。1940年5月末から、グデーリアンは2装甲集団から成る臨時部隊「グデーリアン装甲集団」(*Panzergruppe Guderian*) を指揮した。

¹² Horst Boog et al. (eds.), *Germany and the Second World War. Vol. 4. The Attack on the Soviet Union*, Oxford 1998; David Glantz, *Operation Barbarossa. Hitler's invasion of Russia 1941*, Cheltenham 2012; Christian Hartmann, *Operation Barbarossa. Nazi Germany's War in the East, 1941-1945*, Oxford 2012を参照。

装甲部隊は4個軍団から編成され、モスクワを目指す中央軍集団の攻撃の先頭に立った。8月末には、ウクライナの首都キエフの攻撃を支援するために、グデーリアン率いる第2装甲集団は最高司令部の命を受けて南方に転進した。この転進は、上官らの反対を押し切ってグデーリアンを説得したヒトラーが決定したことだった。決定によってソ連軍の南方の防御網は崩壊したが、同時にモスクワ攻撃の先頭に立つ部隊の戦力も低下した¹³。キエフ会戦後、グデーリアンはモスクワ進撃を再開した。しかしながら、赤軍の粘り強い防衛、ドイツ軍の補給線の延伸、冬將軍の到来により、モスクワ進撃計画は頓挫した。1941年末にドイツ国防軍は行き詰まりを見せ、ソ連軍の反撃が迫っていた。この状況で前線の何人かの指揮官は、消耗した部隊を救うために戦術的な退却を提言したが、ヒトラーはこれをきっぱりはねつけた。こうした危機的な情勢の中で、グデーリアンは1941年12月26日に不服従を理由として解任された。グデーリアンが、第二次大戦初期の電撃戦の幕切れと同じタイミングでキャリアの危機を迎えたのは、極めて象徴的なことである。指揮官としての重圧が、彼に重大な健康問題を引き起こしていた。とはいえ後から考えると、この不本意な休養が結果的に本人のためになった。そのおかげで、1942～1943年に東部戦線に加わったドイツ軍大将の多くがそうなったように、戦争犯罪に関与することを免れたのだ。だが、最高司令部のいかなる命令もためらいなく実行する用意があることをグデーリアンが証明するには、1941年8～12月までの短い期間で十分であった。ほとんどの大将と同様に、グデーリアンは侵攻の準備期間中にドイツ国防軍の最高司令部が発布した複雑な「刑事命令」を回覧し、これに従っていた。この命令は、ソ連戦への国際法上のルールの適用を事実上停止するものであり、政治委員、パルチザンと想定される者（ユダヤ人にしばしば用いられた符号）、ソ連の戦争捕虜は確実に死刑に処せられた¹⁴。

¹³ David Stahel, *Kiev 1941. Hitler's Battle for Supremacy in the East*, Cambridge 2012を参照。

¹⁴ Omer Bartov, *The Eastern Front, 1941-1945. German Troops and the Barbarization of Warfare*, New York 1986; and Felix Römer, *The Wehrmacht in the War of Ideologies. The Army and Hitler's Criminal Orders on the Eastern Front*, in: Alex J. Kay, Jeff Rutherford, David Stahel (eds.), *Nazi Policy on the Eastern Front, 1941. Total War, Genocide, and Radicalization*, Rochester 2012, pp. 73-100.

装甲兵総監（1943～44年）

バルバロッサ作戦が大失敗に終わった後、ドイツ国防軍はウクライナの工業拠点への攻撃とコーカサス地方の油田への進撃を通じて、1942年に攻撃を再開する計画を立案した¹⁵。しかし、この攻撃は必要な勢いを得られなかった。赤軍は後退したが、壊滅してはいなかった。ドイツが敵以上に大きな損失を被らねばならないことが、日ごとに一層明白になった。さらに赤軍は、1941年の敗北から学び、わけてもドイツ軍の装甲戦のドクトリンを学んでいた。その結果として、戦車同士の戦闘がドイツ国防軍に更に大きな犠牲をもたらした。ソ連の新型戦車——特に中戦車 T-34 と重戦車 KV-1——に対して、ドイツ軍の射撃は得てして通用せず、これが紛れもない戦車ショックを引き起こした。

東部戦線の危機を受けて、ヒトラーは1943年3月にグデーリアンを呼び戻さざるを得なかった。ヒトラーは、技術上及び作戦上の手詰まりを打開してくれる戦車の専門家を必要としており、兵士の間でグデーリアンの人気が高いことを熟知していた。ここでもグデーリアンは、装甲兵総監に任命されることによって、彼が自力で大きな困難を乗り越えたことはないが、ヒトラーその人を含めて、影響力がある地位に就く支援者に恵まれていたことを再び証明した。新たな役職において、グデーリアンは組織を編成する能力を発揮し、教育訓練の分野に精力的に取り組んだ。とはいえ、軍備と作戦計画に関する重大な決定は、彼の復帰前に既に下されていた¹⁶。第二次世界大戦最大の地上戦であるクルスクの戦い(1943年7月5～23日)の計画段階で、このことが明白になった¹⁷。グデーリアンは、作戦の計画策定と実行に対して何も口出しできなかった。にもかかわらず彼は、ドイツ軍の次世代戦車、具体的にはV号戦車(パンター)、VI号戦車(ティーガー)、駆逐戦車フェルディナントの導入と訓練に力を注いだ。これらの新型戦車の生産

¹⁵ ブラウ作戦については、Bernd Wegner, *The War against the Soviet Union 1942-1943*, in: Horst Boog et al. (eds.), *Germany and the Second World War. Vol. 6. The Global War*, Oxford 2001, pp. 843- 1215; David M. Glantz and Jonathan M. House, *To the Gates of Stalingrad. Soviet-German Combat Operations, April-August 1942*, Lawrence, KS 2009 を参照。

¹⁶ Pöhlmann, *Panzer*, pp. 395-399.

¹⁷ クルスクに関して、十分な調査に基づく入門書として Roman Toepfel, *Kursk 1943. The Greatest Battle of the Second World War* (Warwick 2018) がある。時系列の問題に関しては pp. 17-18 を参照。

は、クルスクの会戦に向けた計画策定と直接関連するものだった。つまり、新型戦車が多ければ多いほど、この戦いで赤軍に勝利する確率が高くなるだろうというわけだ。他方で、工場でより多くの戦車が完成するまでドイツが長く待つほど、ソ連軍の防御陣地はそれだけ守りが堅くなった——これは、ドイツ軍の最高司令部が解決できなかった典型的なジレンマであった¹⁸。

クルスクに始まるソ連の反撃は、グデーリアンがしばらく不在だった間に東部戦線では戦闘の様相が変化したことを示すものだった。赤軍は、特に諸兵科協同と縦深作戦に関する知識を深め続けた。同時にドイツ国防軍は、深刻な損失も被っていた——同軍がもはや埋め合わせることができない損失だった。これ以降、ドイツの戦車は作戦上の役割を放棄せざるを得なかった。戦車は、突撃砲（砲兵科の管轄であるという理由でグデーリアンがひどく軽蔑していた）とともに歩兵隊の戦術的な防護に回るようになった。最終的にはドイツ空軍が制空権を失い、装甲部隊はソ連の地上攻撃機による攻撃にさらされた。

グデーリアン大将はこの問題への解決策として、装甲部隊の作戦予備戦力の増強を主張した。これは言うは易いが実行は不可能であった。グデーリアンは1944年の戦争に勝とうとしたが、1943年の戦争の勝利には貢献できなかった。結局のところ、グデーリアンは、電撃戦という時代遅れな発想にとらわれていた。1944年6月の連合国軍によるフランス上陸作戦に備えた防衛でも、この作戦面での視野の狭さが明らかになった。連合国軍の戦略的な意図は誰もが知るところであったものの、ドイツ軍最高司令部は、Dデイの実際の時期と場所を特定するのに苦労した。そのため、反撃用の予備戦力としての装甲師団の配置を決めるのが難しかった。長い議論の末に——その議論にグデーリアンらも一役買った——ヒトラーは譲歩を決めた。ヒトラーの決定は、水際への装甲部隊の配置に加えて、後方に予備戦力を置くというものだった。この計画は奏功しなかった。だが、別の案——敵の意図を突き止めた後に大規模な反撃に出るため、全装甲部隊を後方に温存する——であれば結果は変わっていたかどうかは疑わしい¹⁹。確かに装甲師団は、カーン周辺でイギリス軍の進軍を阻むのに決定的な役割を果たした

¹⁸ Toepfel, *Kursk*, pp. 38-51.

¹⁹ Pöhlmann, *Panzer*, pp. 440-448.

だろう。だが今や、装甲師団に死をもたらすのは空からの攻撃であった。連合国軍が制空権を握ったことで自由な作戦行動がとれず、補給が大きく妨げられた。装甲戦の発展は、次の段階を迎えていた²⁰。

陸軍参謀総長（1944～45年）

1944年7月20日、ヒトラーに対する軍のクーデターにより、グデーリアンの装甲兵総監としての任務は本意ながら終わった。保守派を中心とする元政治家と高級将校によるグループが、ヒトラーの死によってのみドイツを破滅から救うことができると考えたのだ。国内予備軍参謀長を務めていたクラウス・シェンク・シュタウフェンベルク大佐（伯爵）が、ラストエンブルクの総統大本営でのヒトラーとの会談中に時限爆弾を仕掛ける役を買って出た²¹。軍による抵抗に対するグデーリアンの姿勢は、今も判然としていない。彼の戦後の判断は、否定的な立場を示すものである。このような姿勢をとった理由は、必ずしもイデオロギー的な指導者として彼が独裁者ヒトラーを信じていたからではなく、最高司令官がグデーリアン自身にとって有用だったからだ。グデーリアンは、ヒトラーに高く評価されていた。加えてグデーリアンは、同僚の多くと同様に、自分が忠誠を誓った独裁者を殺害することに抵抗を覚えた。最終的には、戦前からの個人的な宿敵だったルートヴィヒ・ベック退役大将が、抵抗グループの首謀者に名を連ねていたことが、グデーリアンがクーデターへの参加を拒む要因になった。大将として名声あるグデーリアンの支持を取り付けるために、抵抗グループは水面下で彼に接触したのではないかと考えられる。事態の成り行きからグデーリアンは接触を拒んだと示唆されるが、彼は接触があったことを当局に知らせなかった²²。クー

²⁰ 戦車作戦と空軍の役割については、James Jay Carafano, *After D-Day. Operation Cobra and the Normandy Breakout*, Boulder and London 2000; John Buckley, *British Armour in the Normandy Campaign*, London and New York 2004 を参照。

²¹ シュタウフェンベルクのクーデターについては、Winfried Heinemann, *Operation "Valkyrie." A Military History of the 20 July 1944 Plot*, Berlin 2021 を、全般的な背景については、Peter Hoffmann, *The History of the German Resistance 1933-1945*, Montreal 1996 を参照。

²² 7月の暗殺計画中のグデーリアンについては、Hart, *Guderian*, pp. 98-102 を参照。

デターが万が一成功した場合に備えて、保険を掛けていたのだ。計画実行の当日、グデーリアンが遠方の部隊を視察し、それ以外の時間は——ベルリンからもラステンブルクの大本営からも遠く離れた——自宅で過ごした事実は、彼が7月20日のクーデターの余波から物理的に可能な限り距離を置こうとしたという説を裏付けるものだ。

暗殺は失敗した。負傷したヒトラーが下した最初の決定の一つは、グデーリアン呼び戻し、陸軍参謀総長代理の役職に就くよう命じることだった。独裁者ヒトラーは、この機を捉えて、(ヒトラーの認識によれば)自分を成り上がり者の政治家にして軍事の素人として常々見下してきた保守的な軍部エリート層を一掃する決意を固めていた。参謀本部嫌いで知られていたグデーリアンは、この軍部粛清にうってつけの候補者だった。グデーリアンに戦略的な野心はなく、政治に対し従順だった。ヒトラーは、グデーリアンに農村部の地所とそれなりの下賜金を与えて、早い段階から大将を懐柔していた²³。

ここに至ってグデーリアンは、陸軍参謀総長として初めて、彼が忌み嫌った先任者がそれまでしてきたように、全面的な責任を担うことになった。グデーリアンは、教育と経験いずれの意味でも最高司令官の戦略的顧問にふさわしくなかった。だが皮肉なことに、1944年夏以降は戦略的な情勢が次第に絶望的となっていたため、助言などもはや重要ではなくなっていた。連合軍はイタリアとフランスに上陸し、赤軍はベラルーシ中央部でドイツ軍を撃破していた。同時に、ドイツ国内の都市と軍需工業は、連合軍の爆撃作戦によって破壊された。1944年10月、米国とソ連が初めてドイツ領内に進軍した²⁴。この時点で、グデーリアン大将の戦略的な助言はどのみち不要になっていた。ヒトラーはもはや、周囲の戦略的な協議などさして気に掛けなくなっていたからだ。ヒトラーが必要としたのは、彼自身の軍事的な方針を厳密に実施してくれる実行役だった。

1944年8月24日付のグデーリアンから参謀本部への命令は、ヒトラーへの無条件の忠誠を求めるものだった。「諸君以上に熱狂的に勝利を信じ、その信念に

²³ Gerd R. Ueberschär und Winfried Vogel, *Dienen und Verdienen. Hitlers Geschenke an seine Eliten*, Frankfurt/Main 1999, p. 110, 223. を参照。

²⁴ Rolf-Dieter Müller (eds.), *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg. Vol. 10/1. Der Zusammenbruch des Deutschen Reiches*, Munich 2008.

あふれている者はいない。(中略) 無条件の忠誠の手本となれ。ナチスなしに帝国 (Reich) の未来はない」²⁵。この文書は、内容と語調いずれの面でも不適切なものとして引用されがちである。しかしながら、これはグデーリアン自身が置かれた極限状況を示すものでもある。ヒトラーの治安機関は、抵抗分子とみなされた者やその家族に対して容赦なく、社会階級や軍での地位、政治的な役職をもってしても身を守ることはできなかった。

新たな役職においてグデーリアンは軍事法廷の一員にもなり、暗殺計画に加わった者(または加わったと考えられる者)を軍から追放し、ナチスの「人民法廷」で裁判にかけ判決を受けさせる責任を負った。後に彼は、この委員会での自身の役割を、より悪い結果を回避するための試みだったと説明している²⁶。この軍務によって彼自身が個人的責任を問われる可能性もあっただろう。すなわち、1944年8月のワルシャワ蜂起を陸軍参謀総長として鎮圧したかどで、ポーランドは戦後グデーリアンの身柄引渡しを要求することになる。この要求は、グデーリアンをニュルンベルク国際軍事裁判に証人として招致し、米国の軍事情報部門の情報源として利用することに関心を抱いていた米政府当局によって却下された²⁷。

1945年3月、グデーリアンは沈みゆく船の船長の側近という自らの地位の危うさを悟った。そこで彼は、これまで常に得意としてきた行動をとった。対立をエスカレートさせたのだ。今回は、未遂に終わったクストリン要塞への反撃をめぐり、ヒトラーと激しい議論を戦わせた²⁸。その結果、彼は(またしても)解任され、1945年5月に欧州で戦争が終結した時点では、第一線から身を引き、ナチス中枢から遠い安全な立場にあった。

²⁵ Geoffrey P. Megargee, *Inside Hitler's High Command*, Lawrence KS 2000, p. 214.

²⁶ 前掲書pp. 213-214.

²⁷ Jens Brüggemann, *Männer von Ehre? Die Wehrmachtgeneralität im Nürnberger Prozess 1945/46. Zur Entstehung einer Legende*, Paderborn 2018, p. 56; Alaric Searle, *Wehrmacht Generals, West German Society, and the Debate on Rearmament 1949-1959*, Westport 2003.も参照

²⁸ Macksey, Guderian, pp. 197-198を参照。マクゼーは、グデーリアンがヒトラーと面会する前に、在ドイツ大使館付駐在武官の大島浩と酒を飲んでいたせいで、議論の最中に激高したのではないかと示唆している。

ヒトラーの指揮官

ハインツ・グデーリアンのキャリアを振り返ると、他の軍人の経歴以上に光と影が浮き彫りになる。彼は優秀なまとめ役で、兵士らを鼓舞できる人物だった。戦術面では、粘り強い戦士ではなく楽観的なギャンブラーであり、防御より攻撃の人であった。将官として、自らの兵科の枠内で作戦を展開する場合には必ず最高の力を発揮した。自身も参謀本部付の将校でありながら、参謀本部の精神構造を軽蔑していた。

彼は後に自伝的著書において、自身が脚光を浴びるために、同僚と部下がドイツ軍装甲部隊の強化に果たした役割を意図的に軽く扱った。グデーリアンは決して孤高の先駆者ではなく、キャリアの大半を通して、彼を保護し障害を取り除いてくれる、影響力ある支援者に恵まれた革新者だった。

グデーリアンは、ナチスの戦争を支えた人種差別的・犯罪的な思想や行動がなかったために、ニュルンベルクの絞首台やソ連の強制労働収容所を逃れたわけではなかった。そうではなく、1941年と1945年に解任されたことで、グデーリアン自身は東部戦線の闇に深く加担せずに済んだだけだった。1945年以降、グデーリアンはこの戦争の犯罪的性格や、彼がそこに果たした役割を問題視することに、さして時間を費やさなかった。むしろ彼は書面で、ドイツがNATOに貢献する前提条件として、ドイツの完全な主権に加えて、戦争犯罪人の訴追を早期に終結させることを要求した²⁹。グデーリアンは、イデオロギーに支えられた国家社会主義者の将校ではなく、単なる日和見主義者であった。そしてヒトラーに仕えた指揮官たちの中で、歴史上の自分自身のイメージに大きな影響を及ぼすことができた数少ない軍人の一人だった。

²⁹ Heinz Guderian, *Kann Westeuropa verteidigt werden?* Göttingen 1950, p. 84; *ibid.*, *So geht es nicht! Ein Beitrag zur Frage der Haltung Westdeutschlands*, Heidelberg 1951, pp. 63-69を参照。